

「まち」の住まいと暮らし

民族の「界限」

マレーシアの国土はボルネオ島にある東マレーシアと、マレー半島からなる西マレーシアで構成されています。赤道直下の熱帯気候にありますが、複雑な地形で国土は豊かな表情をもっています。広い平野に広がる稲作地帯から、大都市とその郊外、広大なプランテーション、そしてジャングルの頂には冷涼な高原避暑地もあります。

歴史的にはマレーシアは、土着の王が群雄割拠する時代を経て、ヨーロッパ諸国から植民地支配を受けます。十六世紀、マラッカのポルトガル植民地支配に始まって、ついでオランダの支配を受け、さらに近代以降から独立までのながい時期は英国の植民地となりました。その間、アジア海域世界の人々の往来や移住によって現在の多民族社会の素地がつくられてゆきます。

道路や水路、施設などの都市の骨組みは、時の支配者や都市建設の技術によってもさまざまに影響

を受けています。さらにそれぞれの地域社会は、その場所の成立過程によっても民族集団や暮らしが異なり、それが現在のありさまを決定しているようです。

たとえば、インド系の人々が建設に従事した鉄道基地の周辺は、インド系の人口比率がいまも高いとか、中心市街地の商店街のある部分には中国系の印刷屋さんが集中していたりします。また農村にはマレー系の人たちが目立ちますが、小さな商店街には中国系の店も多い。まちや村といっても、それはひとつとして同じ表情をもつものではなく、地形や民族構成、歴史的な形成過程などのさまざまな要因が反映してそれぞれの雰囲気や個性となつてあらわれています。

もつとも現在では、都市の周辺や郊外に住宅団地が著しい勢いで建設されており、マレーシアの住宅は、数の上では住宅団地の戸数のほうが、村やまちに建っている従来型の住まいよりも多いのも事実です。

ここでは、マレー半島の北部にあるペナン州ジョージタウンの住まいと暮らしを中心に紹介していきます。ペナン州は半島の西海岸に位置し、マレー半島側にある地域とペナン島の部分に大きく分かれます。ジョージタウンはペナン島北東部に位置しています。

マレーシアは、連邦政府のもとに州政府があります。州政府は比較的に大きな行政権限を有し、また州財産や企業体をもつこともあり、地域社会の開発に大きな力をもっています。州のもとには地方自治体があります。

ジョージタウンはマレー半島北部有数の都市であり、ペナン州の州都です。

マレーシアではもつとも早く英国人が上陸し、都市の建設が進んできました。マラッカ海峡の北端に位置する港町です。マラッカ海峡はインド洋と東アジア諸国をつなぐ海の要衝で、日本にとつても重要な海域です。たとえば中東から日本に向かう石油タンカーの主要ルートです。

ジョージタウンはそのインド洋と海峡の結節点となる位置を占め、航空機に旅客が移った今でも、棧橋にはクルーズ船や外国の軍艦も停泊します。またインド洋に出漁をひかえた日本の遠洋漁船も立ち寄ります。マラッカ海峡を抜けてインドネシアに向かう旅客船も発着します。

街角は中国系やインド系、また島にもともと住んでいたとされるマレー系の人たちの、それぞれの文化が入り混じっていて港町独特の国際的な雰囲気をつたえています。

ジョージタウンへの道のりはいくつかの方法があります。ペナン島には国際空港があり、東南アジアはもちろん世界各地から国際線が飛んでいます。中国やインドとの経済関係の強さからか、この両方面への便も多く、またメッカ巡礼に向かうムスリムのためにサウジアラビアへの臨時便も飛んでいます。

島とマレー半島はペナン・ブリッジで結ばれ、毎日の通勤やペナン島にある工業団地からの物流に使われています。国境を越えてシンガポール、タイ方面へ向かう長距離バスも運行しています。最近では交通量の増加で渋滞に見舞われることも多く、二本めのペナン・ブリッジが架けられることになりました。

こうして陸路や空路でもアクセスが可能になったわけですが、それでも、ペナン島へは昔ながらのフェリーが魅力的です。私は、はじめてのペナン行きにフェリーを選びました。

コバルトブルーの海峡の向こうにジョージタウンが近づいてきました。建ち並ぶ柿色の屋根が見え



ペナン州ジョージタウン、ビーチストリート。植民地時代に建てられた銀行や税関の町並み。その向こうに港と対岸のパタワースの町並みが見えます

ます。個人住宅の家並みと、銀行や商館の西洋建築、旧税関建物の時計台も見えます。その背景には近年建てられた高層ビル、さらに向こうには深い緑をたたえた高原のペナンヒルが見えてきます。ゆつたりとした船足のこの短い旅はジョージタウンへ入る期待感を高めてくれます。

まず目を引くのは、その建築群と信仰の多様さではないでしょうか。街を歩くと、きわめて狭い範囲にヒンズー寺院があつてすぐ近くにはモスクがある。その向こうにはキリスト教の教会も見えます。これは市街地だけではなく、郊外に行つても無数の寺院や教会があり、また小さな祠ほこらもそここににあります。ひとつの通りでさまざまな神様とそれを信じる人たちが同居している光景を見ることになります。

ヒンズー寺院の前にはたくさんインド系の人たちが集まつて、礼拝の準備をしています。多くのインド系に混じつて、そこでは中国系の人々が、廟でするように手を合わせて三拝をしている姿もときおり見かけます。「偉大な神様の前では人はみな同じで、神様どしはみんな友だち」ということでしようか。しなやかに信仰と日々の生活がとけ合っているのがわかります。

通常、市街地は圧倒的多数を中国系の人々が占めているのですが、それでもマレー系やインド系の

人たちが集まって暮らしている地区があります。同じ民族が集中することで、その街区がその民族集団の存在を感じさせるようになってきます。しかしそれは、民族ごとに壁や門をつくって住み分けをしたりしているのではなく、宗教施設や市場を中心に、ゆるやかにいずれかの民族が多く集まって街や境界を形成しているのです。こうした街や境界が無数に組み合わさって、ひとつの都市や地域が成り立っています。

変幻自在のショップハウス

街なかには、ショップハウスがあります。

文字どおり「ショップ」と「ハウス」が一緒になったもので、一般に一階は店舗、二階以上は住まわすとして利用されています。ジョージタウンにはこのショップハウスと呼ばれる建物がたくさんあつて、一説によるとアジア諸国の都市で、これほどまとまつているところはめずらしいのだそうです。

ショップハウスはたいがい間口が狭くて、奥行きがとて長い。植民地時代、建物への税金が間口幅に応じて課せられていたからです。いまでも古い記録を見ると、「この通りはフィートあたり五ドル」のように決められています。こういったルールは日本の町屋と同じようです。

棟と棟のあいだに中国語で「天井」と呼ばれる中庭のようになっている場所があります。換気や採光のことを考えると、必要なスペースです。また、風水のうえでも必要な要素が多いようです。

ある専門家が日中に温度と空気の動きを測ると、ショップハウスの内部は外部よりも温度が低く快

適であったと聞きました。もちろんエアコンの冷却力と涼しさにはかえません。それでもショップハウスは自然の通風と換気を頼りにした合理的なつくりになっています。熱気がこもらないように室内の壁の上部は金網になっています。

ジョージタウンは風通しのよい町で、朝夕、海からと山からの風が吹き抜けてゆきます。洗濯物は階段の踊り場や吹き抜けに面したところにつるしておけば、直射日光に当てなくてもじゅうぶんに乾きます。かえって屋外で干すと強い日差しで日焼けをしてしまうほどです。

こうしたショップハウスは、中国の南部からベトナム、タイ、インドネシア、そしてマレーシアと、アジアの広い地域に見られます。中国系の人たちやまた海洋アジアを移動した人たちが、建物のカタチや生活様式を伝えたのでしょう。中国系の人たちの文化的影響が強いという説もありますが、そればかりではないようです。たしかに中国で見られる、中庭を居室で囲んだ配置の、四合院の平面形や間取りを半分に割ったようにも見えますし、英国のタウンハウスにも見えます。タイルは英国の象嵌タイルや、イスラームの紋様も見られます。たとえば青色の小さなタイルだけをとってみても、釉薬の深いコバルトブルーから、雲海を思わせるような淡い藍色までバリエーションに富んでいます。紋様も花卉や鳥など、趣向は一樣ではありません。抽象的絵画を思わせる野心的な表現のタイルもあります。壁の色もさまざまです。

スケッチは、ジョージタウンの町並みを、ペナン島でもっとも背の高い建物の「コムタ」の展望台から描いたものです。ここでも郊外化が進んでいます。いまだに中心部には美しい家並みが望めま



ショップハウスの街区（ジョージタウン）。間口が狭く奥行き長いショップハウスが密集しています。しかし近年、駐車場になったりして歯抜けになっているところも目立ってきました

す。この街区の多くの建物は、第二次世界大戦より前に建てられました。幸いにもこの地区は戦火に見舞われることなく、またその後の開発を受けることもありませんでした。いまでも往時の佇まいが楽しめます。

建物の平面は基本的に単純な四角形で、間口いっぱい表通りとつながっていて開放的です。構造的には建物の両側にある壁で荷重を支えていて、ほかには太い柱を設ける必要がないので広々としていて間取りの改造も容易です。

建築後、百年はたつていると思われるものであっても、エアコン完備の銀行にもなりますし、インターネット・カフェにもなります。棺桶屋さんの跡にベビー用品の店も入ります。廟にもなりますし印刷工場にもなります。ショップハウスの建ち並ぶ街角を見ると、誕生も死も、伝統も先端技術も、一緒に仲よく並んでいて飽きることがありません。

その魅力はその店舗だけにあるものではありません。街なかの至便な住居として捉えることもできません。二階や三階は住まいになっていたり、事務所として使われていたりします。まわりにたくさんの方が住んでいることが数多くのショップハウスの商いを成り立たせているのでしょう。モノとしての建物が自らの存在を主張しすぎることなく、おおらかに存在していて、それを使い手がたくみに改築したり増築したりしてまさしく変幻自在です。

スケッチしたショップハウスは、一階に茶店があつて、二階は安宿になっています。もともとはジョージタウンを往来する人のための商人宿で、近ごろではバックパッカーたちも泊まっています。いちばん奥にシャワーやトイレ、そして厨房があります。内部は薄暗く、高い天井にはファンが回つて



ショップハウス(ジョージタウン)。1階は食堂。いつでも食事がとれます。2階は旅社。表の部屋は大部屋で、裏側の部屋は客が入らないかぎり経営者夫妻の寝室です

います。

この宿には何度か泊まったことがあるのですが、ここにはホテルのようなフロントや事務室はありません。階段の踊り場にいつも人がいて、そこが帳場です。旅人が到着すると、ここで宿帳に記帳してお金を払う。宿代は格安で一泊数百円にしかありません。いわゆる多人房(ドミトリー)で大部屋に複数の寝台があります。ベッドはそのすべてがどちらかに傾いでいて、人型にへこんだ疲れたマットレスが敷いてありました。風通しがよいせいか、幸いにも南京虫はいません。表通りのバイクの爆音を気にしなければそれなりに快適です。

大部屋にはいつも個性派の旅人がいました。あるときはこんな顔ぶれでした。

アメリカから来た自称数学者のおじさんは無口で、ベッドに横たわったまま、表紙の取れてしまった大学ノートになにやら数式を書きつけています。その隣には、パスポートをなくしたまま旅を続けているという中国人の船員さん。この人は自分の寝ているベッドを隣部屋のタ

イ人が狙っていると警戒しています。

インド生活を終えてマレーシアにたどり着いたというイギリス人のおじさんは、週に一度郊外の滝まで沐浴に行く以外はいつもからだに白い布を巻きつけて裸足で歩いています。あともうひとり、確認をしたわけではないのですが、食事とトイレ以外は、いつも寝ているとされる国籍不明のおじさんはこの部屋の長老格です。

もつとも日がな一日、炎天下の街角に出かけては絵を描いて帰ってくる私も、彼らからみれば変わったやつだと思われていたに違いありません。一度、自称船員の中国人のおじさんに「おまえはスパイではないか」と真顔で詰問されたことがあります。建物の図面やまちの地図を集めていたからです。なるほど、スパイに見えないこともないでしょう。一九九〇年代でも、日本で市販されているような精度の高い地図は機密資料として扱われ、大学などでも嚴重に保管されていました。しかしスケッチブックを見せると彼は怪訝な表情をして、おいと横を向いたまま話すのをやめてしまいました。すっかり暑さにやられてデッサンの狂ったスケッチを見て、私のことをどうみたのでしょうか。

旅人たちの生活パターンはばらばらで、いつもだれかが寝ていて、だれかが出かけています。しかし彼らの生活が驚くほど質素で簡潔である点はみな同じでした。ビニール袋に入ったタオルや身の回り品以外に持ち物がない人もいます。それでも彼らには掛け値なしの自由があります。人間、身軽で軽快がいちばん。そうこうしているうちに私の旅行鞆からも一つひとつ荷物が少なくなつてゆきます。

雨が降つても風が吹いても安宿の一日はエンドレステープのように過ぎてゆきます。四季の明瞭な日本から来た私にとって毎日が真夏日です。季節の移ろいで時間の経過を意識していた生活から外れてしまうと、記憶を刻み付けるべきスケールを失つてしまうのでしょうか。時間の感覚が曖昧になつ

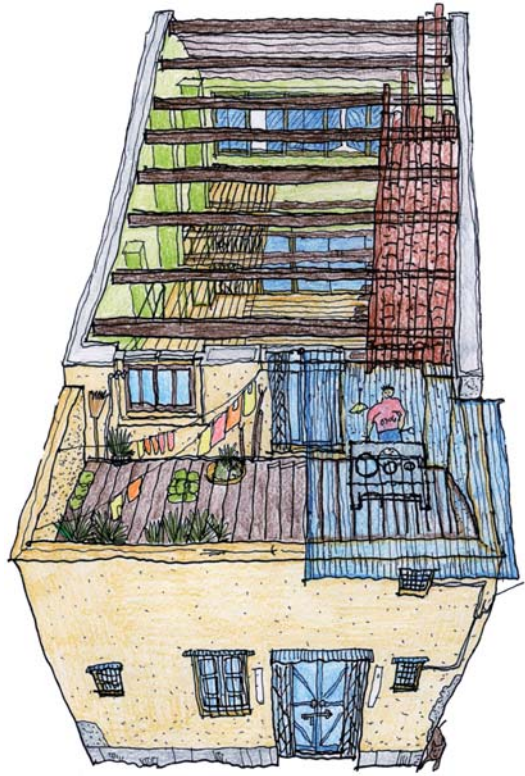
てきます。無限にこの大部屋での生活が続いていくような気になります。

多くの旅人にとって旅の目的はあるようでないような、もしくは以前はあったかもしれないけれども途中で日に焼けてとけてしまったか、もしくはどこかに置き忘れてしまったか。

宿のルールは特にありません。ただ保証金の代わりにパスポートを預けなくてはいけなかったのです。宿帳に記帳をさせると、私のパスポートは宿のおじさんによつて無造作に階段の踊り場にある引き出しにボンと投げ入れられました。さすがにこれには不安を覚えました。けれども不安には及ばず、いつもここにはだれかが座つていて、華字新聞を読んだりラジオを聴いたりして、とにかく貴重品のそばにはだれかがいました。オーナーもその友人たちも、そして家ネコも、この踊り場がいちばん風通しがよくて涼しいと知っているからです。うだるような暑い昼下がりに薄暗い踊り場に座つて、眩暈がしそうな強い日差しの表通りを眺めていると自然に眠くなつてきます。海から乾いた風が流れてきます。気がつくと、おじさんは午後の眠りに入っています。

ある日、思ったつて、大部屋での日々をひとまず終わりにして、翌早朝のバスで発つことにしました。行き先は、バスの席がたまたま空いていた、マレー半島東海岸です。前夜のうちに宿代の支払いをすませて、一足早くお別れを言いました。

朝が来ました。大部屋の旅の王様たちはそれぞれ深い眠りのなかです。隣のベッドに寝ている数学の先生の足を引っかけないように静かに荷物をまとめて宿を出ようとすると、入り口は格子のついた鉄扉が閉まつていて大きな南京錠で施錠されています。外に出ることができません。しかしよく見る



ショップハウスの構造。廃屋になっていたショップハウスがあったので、屋根を取り去って建物の構造を書いてみました。調理場のあともあり、調理をしている人物も書き込んでいます

と、薄暗い踊り場の長椅子には、宿守のおじさんが気持ちよさそうに鼾をかいています。申し訳ないなどと思いながら、揺り起こすと眠気眼のまま南京錠を開けてくれました。

外に出て、朝靄の冷たい空気にふれつつ、荷物を背負ったまま振り返って礼を言うと、おじさんはしばらく間をおいて「グッドラック」と送り出してくれました。時間はあるけれども金のない、とりたてて目的のない旅を続けていた私にはこの「グッドラック」は心にしみ入りました。

ショップハウスの構造や間取りは素っ気ないものです。建物の正面には、単純に柱が二本あって、



インド系の雑貨店(ジョージタウン)。子孫繁栄を祈願してバナナの木が飾られています

二階には窓が並んでいます。一階は表通りに面した扉を開け放すと店があらわれます。あまりに開けつひろげで、表通りから内部のかなり奥まで見通すことができます。商品も、店番をしているおばさんも、昼寝をしているおじさんもみんな見えます。

店の空間は、住まい手を使い方に合わせて装飾したり作り替えたりするだけで、建物の表情が変わります。看板が付き、ペンキが塗られ、商品が山積みになり、カーテンや旗が吊られると、立派に厚化粧した表情になります。もちろん民族ごとに大きく表情も変わってきます。

このスケッチはインド系の雑貨屋さんです。以前は中国系の印刷屋さんだったのですが、オーナ―は壁の色を薄い黄色のペンキで塗り替え、タミル語とマレー語、英語で書きつけた看板をつけました。床のタイルは青い色に変え、またヒンズー教の人たちが神様を招くために用意するフロアーペイントもペンキで描きました。鴨居には緑色の飾りを付け、祭りのときに備えてバナナの木を柱にくくりつけています。

店先に置かれたスピーカーから大音量で流されるオーナー好みのタミル・ビートも立派な演出要素なので



ショップハウスの背中。あまり開放的ではありませんが、洗濯を干したり室内に熱気がこもらないように外側に台所を設けています。トイレやマンディー（沐浴室）はこの部分にたいてい位置しています

しょうか。「いい音楽だろう。インド人らしくていいだろう」と、新装開店相成ったわが店の前でオーナーは満足げな表情です。近くには別の店が同じようにこれまた大音量で別の音楽を流しています。耳をつんざかんばかりの音量で、そばにいとと脳天がじんじんと痺れてきます。それでもすぐ近くの屋台では何事もないように、インド系の人たちがコーヒーを飲んでいきます。

ショップハウスの背中も味わい深いものです。スケッチはショップハウスのいちばん後ろ側です。間口が狭く奥行きが深いので、正面は賑わっていても、裏手には表通りの喧騒も届かず、静かな生活の場です。一部、屋根を取りさつたふうに描いてみました。構造は単純です。二枚のレンガ造りの壁があつて、そこに梁になる木造部分が差し込まれて、屋根や床を支えています。